

英語外部テストを利用した単位認定の妥当性と波及効果

島 谷 浩

Granting Course Credit for Performance on English Proficiency Tests: Validity and Washback Effects

Hiroshi SHIMATANI

(Received October 1, 2013)

多くの高等教育機関において、外部テストとして英語能力テストが頻繁に利用されるようになった。外部テストとは、学校外のテスト専門機関によって作成されたテストで、TOEIC、英検、TOEFLなどが大学でのプレースメントや単位認定によく利用されている。しかし、英語能力テストに対する社会的評価がある程度認知されているためか、それらの妥当性や波及効果に関する研究はほとんど行われていない。本研究は、英語外部テストによる単位認定の妥当性・波及効果を探るために、単位認定を受けて英語履修を免除された学生のその後の大学での英語学習状況を調査し、単位認定を受けた学生への波及効果とその制度の妥当性を検証するものである。単位認定によって英語履修が免除された学生に対して、卒業年度の2月から3月にかけてアンケート調査を行い、43名から得られた回答を分析した。単位認定後の英語力を向上・維持するための自主的な英語学習の頻度と内容、単位認定制度利用の満足度、単位認定制度への意見等を分析して報告する。

Key words : 外部テスト, 単位認定, 波及効果

1. はじめに

最近、多くの高等教育機関において、外部テストとして英語能力テストが頻繁に利用されるようになった。外部テストとは、学校外のテスト専門機関によって作成されたテストで、TOEIC、英検、TOEFLなどが大学でのプレースメントや単位認定によく利用されている。大学・短大・高専での外部テスト利用形態は、1) 入試優遇措置、2) 単位認定の条件、3) プレースメント・テスト、4) 成績評価の一部に組み込まれる実力テストが主である(島谷, 2007a)。外部テストは、「絶対的数値」で得点が表されるため、いつどこで受けたテストでも点数の比較が可能と言われている(片桐, 2006)。一般の英語教師が作成するテスト(内部テスト)では、テスト間の点数比較が困難なため、テスト得点が高いというだけで英語力向上を確認することはできないが、信頼性の高さに定評がある外部テストを利用すると、英語教育の成果を検証可能であると一般的に認知されている。この信頼性の高さが、外部テストが英語教育現場に広く浸透している理由の1つと言える。

表1は、国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会が公表している2005年度、2008年度、2011年度のTOEICが利用された単位認定校数である。単位認定活用校数は、2008年度をピークとして、やや減少気味であるが、大学の4割以上、高等専門学校の7割近くで、TOEICのスコアを単位認定として活用できる制度が確立していることがわかる。

表1 外部テストを利用した単位認定活用校数 (TOEIC 運営委員会 2005, 2008, 2011)

	2005年度		2008年度		2011年度	
	調査校	単位認定校	調査校	単位認定校	調査校	単位認定校
大学	701	264 (37.7%)	724	331 (45.7%)	743	319 (42.9%)
短期大学	403	58 (14.4%)	388	76 (19.6%)	389	68 (17.5%)
高等専門学校	62	35 (56.5%)	62	47 (75.8%)	62	42 (67.7%)
合計	1166	357 (30.6%)	1174	454 (38.7%)	1194	429 (35.9%)

表2は、TOEICを利用した単位認定基準の例（TOEIC運営委員会，2011）である。最も低いスコアで単位認定しているJ大学と認定基準が高いG大学（国際コミュニケーション学科），そして筆者の勤務校である熊本大学の単位認定基準を紹介しているが，大学間で，単位認定基準が大きく異なっていることがわかる。単位認定基準については，公表していない大学も多く，外部テストを利用した単位認定の実態については不明な点が多いのが現実である。大学生の英語力の到達目標は，各大学が個別に設定するもので（緑川，2004），英語教育の目標が高等教育機関においてすべて同一の必要はないが，目標とする英語運用能力が非常に低い大学の存在を，単位認定制度が明白にしてしまっているのは間違いない。

表2 TOEICを利用した単位認定例

J大学（経済）		熊本大学（全）		G大学（国際コミュニケーション）	
スコア	認定単位数	スコア	認定単位数	スコア	認定単位数
270	2	600	2	730	1
		675	4	800	2
		730	6	850	3
				900	4
				950	5

表3は，熊本大学での各学部の外国語科目の必修単位数である。必修外国語科目として，既修外国語と初修外国語を含め，原則として2カ国語10単位以上の科目が履修されることになっている。表3中の初修外国語とは，ドイツ語，フランス語，中国語，コリア語である。

表3 各学部の必修外国語科目履修単位数

	法	文	教育	理	医	薬	工
既修外国語	6	4 6	4 6	6	6	6	6
初修外国語	6	8 6	6 4	2	2	2	0

熊本大学の教養英語カリキュラムは，表4に示されている通りで，学生は，半期・1単位の英語科目を6単位履修する（文学部と教育学部の学生で，初修外国語の単位の履修をより多く希望する者は，既修外国語の必修単位数は4単位となる）。1年次開講科目の英語A-1と英語A-2は，オーラル・コミュニケーション能力養成に重点を置いたクラス，英語B-1と英語B-2は，読解・表現能力養成に主眼を置いたクラスである。2年次開講科目の英語C-1，英語C-2はコース選択制をとっており，1年次に学習した内容を発展させた4コースから2コースを選択して履修する（島谷，2006）。

英語C-3，英語C-4は，2012年度のカリキュラム改訂によりスタートした理系英語の新しい科目で，「医学」，「科学」，「科学技術」に関するテーマで開講されたCALLクラスである。2013年度現在の単位認定制度においては，認定される単位は，英語A-1，A-2，B-1，B-2，C-1，C-2の6単位で，英語C-3，C-4は，単位認定の対象になっていない（熊本大学教養教育機構，2013）。

表4 必修英語科目の内容と単位認定の有無

学年	名称	単位	内容	単位認定
1年次	英語A-1	1	スピーキング（英語母語話者担当）	○
	英語A-2	1	リスニング	○
	英語B-1	1	リーディング & ライティング	○
	英語B-2	1	CALL	○
2年次	英語C-1	1	①スピーキング（英語母語話者担当），②リスニング，③リーディング&ライティング，④CALLから選択	○
	英語C-2	1	①スピーキング（英語母語話者担当），②リスニング，③リーディング&ライティング，④CALLから選択	○
	英語C-3	1	理系英語：「医学」，「科学」，「科学技術」に関するテーマで開講されたCALL	×
	英語C-4	1	理系英語：「医学」，「科学」，「科学技術」に関するテーマで開講されたCALL	×

2. 研究の目的

英語テストの専門家は、外部テストの結果情報をどのように活用するかに際し、そのテストの内容が、これまでの英語の授業内容と合っているか、目的は同じかどうかという点などを検討しておく必要があると主張している(渡部, 2004; 片桐, 2006)。また、テストを活用した結果と、それによって得られた決定は、すべての利害関係者、すなわち学生と指導教員などにとって、有益で、公平でなくてはならないと主張されている(Bachman & Palmer, 2010)。しかし、外部テストに対する社会的評価がある程度認知されているためか、それらを活用した単位認定の妥当性と波及効果を実際に確認する研究はほとんど行われていない。

外部テストを利用した単位認定を受けて英語履修を免除された学生が、その後、どのように大学で英語の学習を行ったか、また、英語履修を免除された学生が、どのようにその単位認定制度を評価しているかなど、学生の立場から、外部テストによる単位認定の妥当性と波及効果を探ることが本研究の目的である。

具体的には、実際に単位認定を受けて英語履修を免除された学生に対してのアンケートの調査結果から、その後の大学での英語学習状況、認定後の英語力を維持するための学習内容、単位認定制度利用の妥当性・波及効果を探る。また、英語履修免除者の単位認定制度への意見を検討し、外部テストを利用した単位認定が、意図された効果を挙げてきているかを検証する。

3. 方法

テストの妥当性(Validity)については諸説あり、さまざまなアプローチがなされているが、Messick(1989)は、妥当性の概念の単一性を主張し、構成概念妥当性がテストの本質的な妥当性であると論じた。また構成概念妥当性の単一性には6つの要素があるとした(Messick, 1996)。それらは、内容的要素、構造的要素、実質的要素、一般化可能性の要素、外的要素、影響的要素で次のように説明されている(小泉, 2007)。

- ① 内容的要素(Content aspect) テストの内容と測定領域の内容が一致しているか
- ② 構造的要素(Structural aspect) 仮定された構成概念の構造と、データの構造が一致するか
- ③ 実質的要素(Substantive aspect) 理論的に予測されるプロセスが、実際のテスト中に見られるか
- ④ 一般化可能性の要素(Generalizability aspect) 時間・グループ・受験状況・タスク・評価者の変化などにより、テストのプロセスと構造が変化するか
- ⑤ 外的要素(External aspect) テスト得点とテストの別のテスト・変数との関係はどうか
- ⑥ 影響的要素(Consequential aspect) テスト得点を解釈・使用する際に社会的な影響があるか

波及効果(Washback Effect)とは、テストが指導、学習に与える影響である(McNamara, 2000)。望ましい方向へ学習者を向かわせるテストほど、そのテストの波及効果は高いと言える(Watanabe, 2004; 島谷, 2007b)。外部テストによる単位認定を目指す学習者が、外部試験で高得点を獲得することができるよう準備し、単位認定基準に到達できれば、それなりの運用能力の向上を意味しているため、正の波及効果はある程度保証される。しかし、大学教育での授業が免除されるということは、逆に言えば、教育を受ける権利を喪失することになるので、負の波及効果も予想される。McNamara(2000)は、波及効果は、予測不能で、望まれた効果が得られたかどうかは、事後集められた情報に基づいて判明するものと述べている。

本論文では、Messick(1989)が示した構成概念妥当性の6番目の要素である影響的要素の観点から、単位認定の妥当性を検証する。つまり、外部テストのスコアを単位認定に利用した結果が、多くの人に納得できる結果をもたらしたか否かを調べる。さらに、外部テストによる単位認定によって、学習者が望ましい方向に進んだかを、学習者側の自己評価から探り、外部テストによる単位認定の波及効果を検証する。

具体的な方法としては、単位認定を受けて英語科目の履修免除となった学生の大学での4年間の学びを、卒業直前のアンケートにより調査する。熊本大学の教養教育事務部の協力により、英語外部テストによる単位認定によって1年次・2年次の教養英語の履修が免除された学生のリストを取得し、それらの学生の卒業年度末にアンケート調査を実施した。

アンケート調査は、2009年度末と2012年度末に2回実施された。アンケートは、学生の卒業年次に実施されているので、2回にわたる同一内容の調査により、2006年度に入学した学生と2009年度に入学した学生から、6年間にわたって単位認定を受けた熊本大生のデータを分析した。アンケートは、自宅に郵送する形で行われたが、無記名で回収された。なお、筆者の講義を受けていた教育学部の学生の数名には、手渡しで配布されたが、無記名で回収された。

2009年度には、44名にアンケート用紙と返信用封筒が郵送され13名から回答を得た（回収率30%）。2012年度の調査では、68名に郵送され30名から回答を得た（回収率44%）。最終的には、112名中43名からの回答を分析対象とした（回収率38%）。

4. 結果

アンケート調査の回答者43名の所属学部と実際に外部試験による単位認定を受けた教養英語科目の単位数は、表5の通りである。医学部生が60%を超えているが、実際に単位認定を受けた単位数の73%は医学部生によるものであった。熊本大学には、文学部・教育学部・工学部・医学部以外に、法学部・理学部・薬学部の3学部があるが、これらの学部生の単位認定申請者は少なく、本研究のアンケートに回答を返した学生はいなかった。

表5 所属学部と単位認定を受けた教養英語科目単位数

学部	文学部	教育学部	工学部	医学部	合計
人数	8 (19%)	6 (14%)	2 (5%)	27 (63%)	43
認定単位数	19 (13%)	11 (8%)	10 (7%)	106 (73%)	146

表6は、外部試験による単位認定を受けた時期である。複数回にわたって認定を受けた学生がいるため、合計が回答者数を上回っているが、1年前期で単位認定を受けた学生が15名（33%）いる点に注目してもらいたい。この15名の学生のうち14名は医学部生である。ほとんどが、入学後に外部試験による単位認定制度があることを知ってTOEICを受験し、初めての受験のスコアで単位認定基準をクリアしている。

表6 外部試験による単位認定の時期

学年	1年		2年		3年		4年		計
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
人数	15 (33%)	13 (29%)	8 (18%)	9 (20%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	45

表7は、単位認定申請時に利用した外部テストのスコアである。熊大での単位認定に利用される外部テストは、TOEICが圧倒的に多く、アンケート回答者の95%以上がTOEICを利用していた。730点以上のスコアを獲得している者が19名（44%）いるが、これらの学生は、教養必修英語のすべての6単位が認定されるため、教養英語授業の受講がすべて免除されることになる。英検の利用者が少ない理由として、二次試験のスピーキングテストが、学生から避けられている可能性があるかもしれない。TOEFLについては、TOEFL iBT方式またはコンピュータ方式を利用した申請者はいなかった。

表7 単位認定申請に利用した外部テストの申請時のスコア

テスト	TOEIC				英検		TOEFL (Paper方式)		
スコア	600-674	675-729	730-799	800以上	準1級	1級	500-529	530-549	550以上
人数	13(30%)	9(21%)	12(28%)	7(16%)	0(0%)	0(0%)	1(2%)	1(2%)	0(0%)
	41 (95.3%)				0 (0.0%)		2 (4.7%)		

表8は、必修英語科目ごとの単位認定制度を利用して認定を受けた学生数である。1年次の科目間で、認定を受けた学生数に大きな差は見られない。特定の科目の受講免除申請が多いということはないようである。1年次科目より、2年次科目の方が認定申請者の数が多くなっているのは、単位認定を受けるために外部テストの受験

準備をし、結果が出るまでにある程度の期間がかかるためである。

熊本大学の現在の単位認定制度の場合、必修英語科目の指導内容にかかわらず単位が認定されてしまう問題がある。例えば、英語母語教員が指導して、スピーキング能力の育成を主に目指している「英語 A-1」という科目が、スピーキング能力を直接測定していない TOEIC のスコアによって単位認定されてしまうのである。表 8 が示すように、「英語 A-1」の認定を 14 名の学生が受けているが、これらの学生は、すべて TOEIC のスコアで単位認定を受けている。

表 8 単位認定を受けた教養英語科目

科目名	1 年次 (各 1 単位)				2 年次 (各 1 単位)		計
	英語 A-1 (会話)	英語 A-2 (聴解)	英語 B-1 (読解・作文)	英語 B-2 (CALL)	英語 C-1 (選択)	英語 C-2 (選択)	
人数	14	15	17	14	30	32	122

表 9 は、単位認定後の英語学習状況を示している。単位認定を受けた後に、英語力を伸ばす、または英語力を維持するための学習・練習などを継続的に行っていたか否かについての問いに対して、回答者のほぼ半数 (51%) が、自主的な学習を継続したと回答し、またほぼ半数 (49%) が全くしていないと回答している。表 5 の本研究のアンケート回答者の 6 割が医学部生であるので、今後は、医学部生と他学部生を比較しながら分析結果を報告していく。

医学部の学生に関しては、医学部生 27 名中 18 名 (医学部生の 66%) が、認定後全く英語学習をしていないと回答している。一方、他学部生に関しては、英語の自主的な学習をしなかったのは、16 名中 3 名 (19%) にすぎなかった。単位認定を受けた学生は、だいたい優秀な学生であるが、医学部以外の学生の方が、英語の自主的な学習に積極的である。医学部生のほとんどは、専門の学習に多忙で、大学での英語学習は眼中にないようである。

表 9 単位認定後の英語学習状況

学部	自主的な英語学習継続		英語学習中止	
	医学部生	他学部生	医学部生	他学部生
人数	9	13	18	3
計	22 (51.2%)		21 (48.8%)	

表 10 は、単位認定後に、自主的に英語学習を継続した 22 名の学習内容である。医学部生 9 名の学習内容は、論文購読が 4 名で一番多く専門分野の学習をメインとしている。リスニング力や会話能力向上に努める者もあり、1 名は英会話教室に通ったと回答している。他学部生は、16 名中 13 名が自主的に英語学習を継続しており、学習内容も英語力向上を主眼に置いている。

表 10 単位認定後の自主的な英語学習内容

医学部生	9 名
・英語論文購読：	3 名 (2 単位認定, 4 単位認定, 4 単位認定)
・リスニング・ディクテーション：	1 名 (4 単位認定)
・リスニング・医学英語論文購読：	1 名 (4 単位認定)
・医学英語・留学：	1 名 (4 単位認定)
・英会話クラブ所属：	1 名 (4 単位認定)
・語彙力増強：	1 名 (6 単位認定)
・英会話教室：	1 名 (6 単位認定)
工学部生	2 名
・英語学習サイト・英語論文購読：	1 名 (4 単位認定)
・映画で学習, 英文記事, 留学生と会話：	1 名 (6 単位認定)

文学部生 5 名

・ TOEIC 学習 :	2 名 (2 単位認定, 6 単位認定)
・ TOEIC 学習・受験 :	1 名 (2 単位認定)
・ ラジオドラマ・留学 :	1 名 (1 単位認定)
・ リスニング・シャドウイング :	1 名 (1 単位認定)

教育学部生 6 名

・ TOEIC 学習 :	2 名 (2 単位認定, 2 単位認定)
・ TOEFL 学習・BBC ビデオ :	1 名 (1 単位認定)
・ ラジオ講座 :	1 名 (2 単位認定)
・ 英文法・長文精読 :	1 名 (2 単位認定)
・ 英語授業聴講・論文・小説精読 :	1 名 (2 単位認定)

単位認定を受けて英語授業の受講免除によって空いた時間の有効活用に対する満足度を質問している。表 11 は、空いた時間を有効に利用できたか否かについての質問に対する回答結果である。全回答者の 79% が、活用できたと回答している。特に、医学部生の 59% は、「大変活用できた」と高い満足度を示している。

表 11 時間の有効活用に対する満足度

	大変活用できた	やや活用できた	あまり活用できなかった	まったく活用できなかった
医学部生 (27)	16 (59%)	5 (19%)	5 (19%)	1 (4%)
他学部生 (16)	6 (38%)	7 (44%)	3 (19%)	0 (0%)
全回答者 (43)	22 (51%)	12 (28%)	8 (19%)	1 (2%)

表 12 は、受講免除によって空いた時間をどのように過ごしていたかについての回答(複数回答可)である。「専門科目の学習」、「休憩・睡眠」、「趣味」など直接英語と関係がない形での活用が上位を占め、「英語の学習・練習」は、10 名にすぎない。特に、医学部生は、27 名中 2 名しか英語の学習に役立ててはいない。

表 12 受講免除によって空いた時間の活用内容(複数回答可)

	医学部生 (27)	他学部生 (16)	合計
専門科目の学習など	17	9	26
休憩・睡眠	16	9	25
趣味	14	0	14
英語の学習・練習など	2	8	10
雑用	6	3	9
就職対策・卒業研究の準備など	1	1	2
自動車学校	2	0	2
留学準備	0	1	1

表 13 は、単位認定制度により教養英語の受講が免除されたことが、大学での学習・生活にどのような影響があったかについての回答である。全体の 42% が「大変プラス」であったと回答し、「ややプラス」も含めると、77% が肯定的に答えている。

表 13 英語受講免除の大学での学習・生活への影響

	大変プラス	ややプラス	特に影響なし	ややマイナス	かなりマイナス
医学部生 (27)	14 (52%)	8 (30%)	1 (4%)	3 (11%)	1 (4%)
他学部生 (16)	4 (25%)	7 (44%)	5 (31%)	0 (0%)	0 (0%)
全回答者 (43)	18 (42%)	15 (35%)	6 (14%)	3 (7%)	1 (2%)

単位認定による英語受講免除に対して高評価が多数を占めるが、「ややマイナス」が3名、「かなりマイナス」が1名いる。非常に少数派であるが、これらの4名の学生の意見は次のようなものであった。

「ややマイナス」

- ・英語の学習をやめる時期が早まってしまっただけになってしまった。(医学部生・6単位認定)
- ・英語を学習しなくなった。(医学部生・2単位認定)
- ・英語を勉強しなくなったから。(医学部生・2単位認定)

「かなりマイナス」

- ・大学に入って全く英語力がついていない。(医学部生・4単位認定)

全回答者43名のうち4名(10%)が、「英語学習をしなくなってしまった」という負の波及効果を問題にしている。単位認定制度が、「英語学習をやめる時期を早める」ことに寄与してしまっているとの指摘は、無視できないことである。ほんの1割程度の意見であるが、外部テストの利用方法として、問題があると言わざるを得ないであろう。

表14は、単位認定制度への学生の意見である。アンケート回答者43名のうち、意見があったのは26名で、そのうち賛成意見が21名、反対意見が5名であった。

表14 単位認定制度への単位認定を受けた学生の意見

賛成意見 21名

[単純に賛成]

- ・良いと思う。(文学部生・6単位認定, 医学部生・4単位認定)
- ・満足している。(医学部生・6単位認定)
- ・このままで良い。(医学部生・4単位認定)
- ・今後も続けるとよい。(医学部生・2単位認定)
- ・時間に余裕ができてよかった。(医学部生・6単位認定)

[外部試験への動機付けになる点で賛成]

- ・外部試験に目を向けるいい機会である。(教育学部生・2単位認定, 医学部生・2単位認定)
- ・TOEICを受ける動機付けになった。(医学部生・2単位認定)

[認定科目や実施方法に要望を持つが賛成]

- ・認定科目を増やしてほしい。専門の英会話や作文など。(教育学部生・2単位認定, 工学部生・4単位認定)
- ・外部試験のスコアで評点を上げてほしい。(工学部生・6単位認定)
- ・内部試験でも実施してもよい。(教育学部生・2単位認定)
- ・知らない人が多いので、もっと広く知らせた方がいい。(文学部生・4単位認定)
- ・認知度をあげるべき。(文学部生・6単位認定)
- ・手続きを簡単に。期限が厳しい。(医学部生・4単位認定)

[条件付き賛成]

- ・授業目標と一致すれば合理的でよいと思う。(医学部生・2単位認定)
- ・授業目標と外部試験にいくちがいがいがないか把握しておいた方がいい。(医学部生・4単位認定)

[教養英語クラスの現状に批判的なため賛成]

- ・講義のレベルによっては、わざわざ受講しなくてもいいと思うものもあるのでいいと思う。(医学部生・6単位認定)
 - ・人によっては、教養英語は時間の無駄である。(工学部生・6単位認定)
-

反対意見 5名

[認定制度に疑問]

- ・高校までの学習で得た知識によって、大学の講義を受けなくてすむ制度は、大学の英語教育の意義を考えさせるものである。(医学部生・6単位認定)

[教養軽視に反対]

・教養の単位数の削減はありえない。責任者は反省すべき。(医学部生・4単位認定)

[英語学習量減少へ反対]

・認定されると勉強量が減るのは良くない。(医学部生・2単位認定)

[代替科目がない点に反対]

・授業時間を減らすためだけ。空いた時間に自由選択の科目がない。(医学部生・2単位認定)

・別に英語の講義があればよかった。(医学部生・6単位認定)

・上級者向けの集中クラス開講もよい。(文学部生・1単位認定)

外部試験による単位認定制度によって、英語クラス履修が免除されることに対して、大多数の学生が賛成しているのは当然であろうが、外部試験への動機付けになる点で賛成や、授業目標と一致すれば賛成のように、もっともな賛成意見もあった。たしかに、単位認定を受けるために、外部試験で高得点を目指して英語学習に取り組み、読解力やリスニング能力を高めることができれば、正の波及効果と言えるであろう。しかし、授業目標と一致していない科目の単位まで認定してしまい、それを学ぶ機会を奪ってしまえば、負の波及効果となる。また、現在の教養英語プログラムに魅力がないため、単位認定制度に賛成とする学生が多いことも判明し、教養英語クラスの改善の必要性も感じられる。

単位認定制度に反対の学生は、極めて少数であるが、教養英語軽視につながる授業時数の削減に反対したり、単位認定により、よりレベルの高い科目の選択が認められるべきだという意見があった。また、「高校までの学習で得た知識によって、大学の講義を受けなくて済む制度は、大学の英語教育の意義を考えさせるものである。」という意見は、まさに大学英語教育関係者につきつけられた厳しい意見と言えよう。

単位認定制度への要望に、単に単位認定するのではなく、上級者向けのクラス等があればよいとの意見があった。表 15 は、もしも上級レベルの英語の授業を履修することができたとしたら、実際に受講を希望したと思うか否かに対する回答で、表 16 は、受講を希望する上級レベルの英語授業の内容である。

表 15 上級レベルの英語授業受講の希望について

	希望した	希望しなかった	わからない
医学部生 (27)	5 (19%)	12 (44%)	10 (37%)
他学部生 (16)	9 (56%)	2 (13%)	5 (31%)
全回答者 (43)	14 (33%)	14 (33%)	15 (35%)

表 16 受講を希望する上級レベルの英語授業の内容 (複数回答可)

	医学部生	他学部生	合計
英会話	18	11	29
ディベート	9	10	19
アカデミック・ライティング	4	7	11
時事英語	4	6	10
資格試験対策	4	5	9
医学英語	2	0	2
文学購読	1	1	2
医学論文	1	0	1
ビジネス英語	0	1	1

表 15 より、上級者向けのクラスを希望する者がほぼ 3 割で、希望しない者、わからない者もそれぞれ 3 割程度であった。学部別では、医学部生と他学部生に顕著な違いが見られる。上級レベルの英語授業の受講を希望した医学部生は、5 名 (19%) しかいなかったのに対し、他学部生は 9 名 (56%) がより上級のクラスを希望していた。単位認定を受けた医学部生は、英語以外の専門分野の学習にかなりのプレッシャーを感じていて、これ以上英語技能の向上に時間をかけるのを避けたいようだ。表 16 から、望まれる上級レベルの英語授業は、高度な会話能力と作文能力であることがわかる。TOEIC で高得点をとっても、これらの表現能力に不安を感じており、大学としては、このような学生への対応も必要である。

5. まとめ

1. 外部テストによる単位認定に、認定を受けた学生のほとんどは肯定的である。77%がプラスであったと回答している。単位認定がマイナスであったと回答した者は 9%であった。少数ではあるが、英語を学習しなくなり英語力が伸びていないことに不満を持った学生が存在することは認識しておくべきである。
2. 単位認定を受けた後に、51%の学生は自主的な英語学習を継続した。しかし、医学部生の 66%は何もしなかったと回答している。
3. 受講免除によって空いた時間を活用できたと 79%が回答している。しかし、主に「専門科目の学習」や「休憩・睡眠・趣味」に過ごしていた。英語力向上と直接関係のない形での時間活用がなされており、指導者側にとっては、極めて残念な結果となっている。
4. 上級レベルの授業履修について、33%があれば「希望した」と回答している。希望する科目としては、「英会話、ディベート、アカデミック・ライティング」などが多く、表現能力の向上を望んでいる学生が多い。
5. 外部テストで測定されていない能力（会話能力など）までも認定してしまい、すべての学生に提供されている英語母語話者による会話クラスなどの受講機会を奪ってしまっていた。指導目標と一致していない内容の外部テストを利用して単位認定をしてきたことに対して、学生から大きな不満が出ている訳ではないが、学生によって不利益であることには違いなく、早急に見直しが必要である。
6. 単位認定によって履修免除するばかりではなく、より高い英語力を目指す者に対して、より高度な授業が提供されねばならない。一部の学生は、認定された科目の代替科目がないことに不満を表明していた。単位取得の義務がない自由選択科目での高度な授業の提供も検討すべきであろう。
7. 外部テストによる単位認定は、高等教育機関での英語教育の存在価値に大きな影響を及ぼしかねないことは予見できたことであるが、「高校までの学習で得た知識によって、大学の講義を受けなくてすむ制度」へ疑問を投げかけた学生が 1 名でもいたことは真剣に受け止める必要がある。外部試験の単位認定の実施については、正当な利用のみに制限する方向で見直しが必要である。

付記

本研究は、平成 23～25 年度科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号 23520679）の助成を受けて行った研究のデータの一部を使用している。第 1 報は、日本言語テスト学会第 16 回全国研究大会（平成 24 年 10 月 27 日）において報告されている。

参考文献

- 片桐一彦 (2006). 「外部テストの導入と実施の注意点」『英語教育』, 55 (8), 26-27.
- 熊本大学教養教育機構 (2013). 『教養教育外国語履修案内 (必修外国語・自由選択外国語)』熊本大学教養教育機構.
- 小泉利恵 (2004). 「より適切なテスト得点の解釈と使用を目指して：妥当性と妥当性検証法」JACET 関東支部月例研究会発表資料. http://www7b.biglobe.ne.jp/~koizumi/JACET_Monthly_Meeting_validity.pdf (2013年9月3日閲覧)
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会. (2005). 『TOEIC テスト入学試験・単位認定における活用状況』(財)国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会.
- . (2008). 『TOEIC テスト入学試験・単位認定における活用状況』(財)国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会.
- . (2011). 『TOEIC テスト入学試験・単位認定における活用状況』(財)国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会.
- 島谷浩 (2006). 熊本大学における英語教育. 『英語教育 (熊本県中学校英語教育研究会会誌)』, 36, 42-43.
- . (2007a). 「英語の外部テスト利用とその波及効果」『熊本大学教育学部紀要 (人文科学)』, 56, 111-120.
- . (2007b) 「評価とテスト」樋口晶彦・島谷浩 (編著) 『21世紀の英語科教育』(pp. 148-164) 開隆堂.
- 緑川日出子 (2004). 「大学生の英語力と到達目標」『英語青年』, 150 (9), 10-11.
- 渡部良典 (2004). 「外部テストの効果的な使い方」『A.C.E. Letter』, 3, 2-3.
- Bachman, L. F. & Palmer, A. S. *Language assessment in practice: Developing language assessments and justifying their use in the real world*. Oxford: Oxford University Press.
- McNamara, T. (2000). *Language testing*. Oxford: Oxford University Press.
- Messick, S. (1989). Validity. In R.L. Linn (Ed.), *Educational measurement* (3rd ed., pp. 13-103). New York: National Council on Measurement in Education/American Council on Education.
- . (1996). Validity and washback in language testing. *Language Testing*, 13, 241-256.
- Watanabe, Y. (2004). Methodology in washback studies. In L. Cheng & Y. Watanabe, with A. Curtis (Eds), *Washback in language testing: Research contexts and methods* (pp. 19-36). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.